

## 教育哲学・思想 特別編

敬愛大学  
佐藤 邦政

1

## ルソーの教育論(1)

- ① ルソーが批判した、当時の「子ども」観とはどのようなものだったのか。
  - 『エミール』に見る「子どもの発見」という考え
- ② 乳幼児は、誰がどのように育てるとよいのだろうか。

2

## 時代背景

- 1712年、スイスのジュネーブに生まれる。父親は時計職人であったが、母親が無くると幼いルソーを身捨てた。ルソーはその後、牧師宅で育てられる。
- 1728年、厳格な牧師と対立し、ジュネーブを出て独学で学び、その後、パリに出る。
- 音楽家として生計を立てようとしたが失敗。この時期、下宿先のお手伝いの女性、テレーズとの間に5人の子供をもうける。しかし父親になる自信がなく、全員孤児院に出してしまふ。
- 1749年、アカデミー懸賞論文に投稿し、「學問と芸術の進歩は人間の風俗を墮落させたが、それとも腐き上げたか」という論文で一等となり、一躍、時の人となる。
- 『人間不平等起源論』で、人間の「自然状態」を定義したうえで、自然状態から文明社会へうつる過程で、欲求の発生、他者との感情や、他人より裕福になること、競争の発生、あるいは、貧富の差など社会の不平等のプロセスを描く。
- ルソーは、当時、人間理性に待んだ文明社会の行く末を憂へ、文明社会は「人間の風俗を墮落させた」とい



3

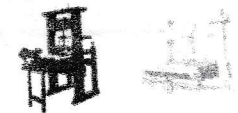
## 天文学の歴史3：地動説

コペルニクス：コペルニクス (1473-1543)  
も異なり、誤謬した  
天動説の考えを「天球の回転について」  
コペルニクスが批判

ガリレオ・ガリレイ (1564-1642)  
天動説を批判し、地動説を支持する  
ガリレオは望遠鏡を用いて天体の観測を行い、  
天動説の2角が長半径の3割に比肩

天文学の歴史3：地動説  
ガリレオ・ガリレイ (1564-1642)  
天動説を批判し、地動説を支持する  
ガリレオは望遠鏡を用いて天体の観測を行い、  
天動説の2角が長半径の3割に比肩

ニュートン：ニュートン (1642-1727)  
天動説を批判し、地動説を支持する  
ニュートンは万有引力の法則を提唱し、  
天動説の2角が長半径の3割に比肩



4

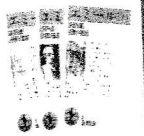
## 社会背景



5

## 『エミール』の執筆

- 1756年、「文明の進歩によって上流階級が生まれ、大人は社交辞令を交わし合い、世襲の子どもが富貴を得る」といった階級の社会についてのルソーの考え方が危機感される。
- 『社会契約論』など発表するが、教会からも通われる身となる。
- 1762年、当時の上流階級の家庭教育を批判する『エミール』を執筆。
  - 子どもは、見習ふ公としての「小さな大人」ではなく、子ども期という固有の時期があり、固有の存在価値があるとしたら子ども観を提示する。子どもに対する見方の変化をもたらしたという意味で「子どもの発見」と言われる。
  - サロンなどを楽しみ、子供の教育を顧みない当時の上流階級の家族のあり方に対して、新しい家庭教育のあり方と、家庭教育という考え方を提示する。
- イギリスの哲学者ヒュームとの交際の失敗などあり、社会からの孤立をいよいよ深め、1778年7月2日、テレーズに看取られて静かに亡くなる。享年66。
- ルソーの死から約10年後、1789年、フランス革命が勃発する。ルソーの思想は、旧制度を批判し革命を準備したものと見て讃えられる。



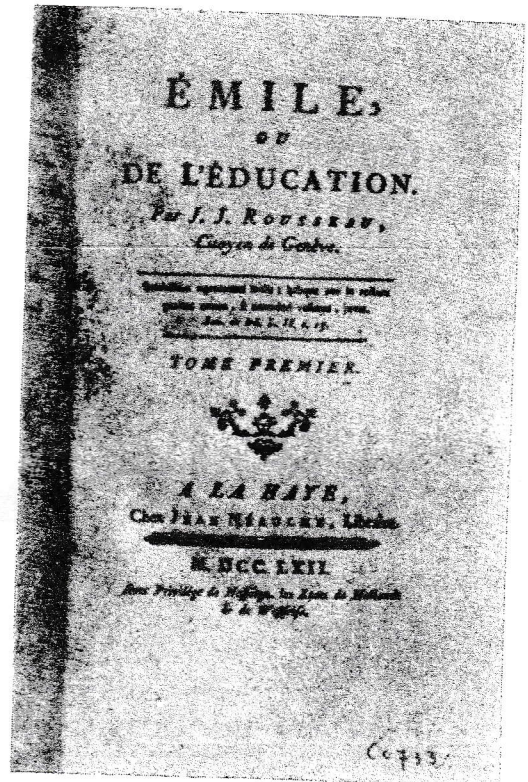
6



序

順序なく、ほとんど脈絡もなく、反省したこと、観察したことをまとめたこの書物は、ひとりの、ものを考えることができる、よき母を喜ばせるために着手された。はじめは数ページの覚え書きをかくつもりだったが、主題にひきずられて、それは知らないうちに、その内容から考えればたしかに大きすぎるが、とりあつかっている題目から考えれば小さすぎる、著作のようなものになってしまった。これを出版したものかどうか、わたしは長いあいだ迷っていた。そして、この仕事をしながらも、わたしは、二、三の小冊子を書いただけでは、一冊の書物といえるようなものをなかなか書けるものではないことを、たびたび感じさせられた。もつとよいものにしようとする努力をしたすえに、わたしはいま、これをそのまま発表すべきだと思っている。一般の関心はこの方面にむけることが必要だと考えるからであり、かりにわたしの考えがまちがっているとしても、ほかの人のよい考えを生む機縁となるなら、わたしはまったく時間をむだにしたことにはなれない、と考えるからでもある。世間から遠く離れて暮らして、書物を発表しても、賞めてくれる人もなく、弁護してくれる味方もなく、それについて人がどう考え、なんというか、それさえ知らないでいる人間は、たとえまちがったとしても、そのまちがいを人が検討もせずうけいれはしまいか、と心配する必要はない。

よい教育が必要であることについてはわたしは多くを語るまい。一般に行なわれている教育が



1762年ネオーム版の扉

で、こうした見地に立つてこの書物を読まれるなら、あなたがたにとって、これは無用な書物だとはわたしは思わない。

体系的な部分と呼んでいいもの、ここではそれは自然の歩みにはかならないが、この点がなによりも読者をきこつかせるだろう。またこの点で、人はかならずわたしを攻撃するだろうが、おそらくそれはむりもないことだろう。人は教育論を読んでいるのではなく、ひとりの幻想家の教育についての夢想を読んでいるような気がするだろう。しかし、どうすればいいか。わたしは他人の考えを書いているのではない。自分の考えを書いているのだ。わたしはほかの人と同じようなものの見方をしない。すでに久しいまえからわたしはそれを非難されている。しかし、ほかの人の目を自分にあたえたり、ほかの人の考えを借りたりすることがわたしにできるだろうか。それはできない。うぬぼれないようにすること、自分ひとりが世間のだれよりも賢明な人間だと考えないこと、それはわたしにもできる。自分の考えを変えることはなく、それに疑いをもつことはできる。それだけがわたしにできることだし、わたしがしていることでもある。たとえときにわたしが断定的な調子で語るとしても、それは読者に押しつけるためではない。自分で考えたとおりに語るためだ。自分がすこしも疑っていないことを、どうして疑問の形で述べることができよう。わたしは頭のなかで考えたことをそのまま正確に語るのだ。

自分の考えをありのままに述べるとしても、それがそのまま権威をもつなどわたしは考えていない。だからいつもわたしは理由をつけくわえて、人がそれをよく検討し、わたしの考えを判断することができるようにする。しかし、わたしはがんに自分の考えをまもりとおそうとは思わないが、やはりそれを公衆に示す義務があると考えている。わたしがほかの人と見解を異にする

よくないことをながと証明するようなこともしまい。そういうことはわたしよりもまえにすでに多くの人がやつておきだし、だれでも知つておきだすようなことはしたくない。ただ注意しておきたいのは、すでに遠い昔から人は口をひらけば既成の方法を非難しているが、だれもまだもつとよい方法を提案しようとはしなかったことだ。わたしたちの時代の文学と学問は、建設的であるよりもはるかに破壊的である。人は大家の口調で批判するが、なか提案するにはそれとはちがう態度をとらなければならぬ。気ぐらゐの低い哲学者にはそれがお気に召さないのだ。一般の効用をめざすと称する著作はいくらもあるが、あらゆる有用なこととのおなでもいちはば有用なこと、つまり人間をつくる技術はまだ忘れられている。わたしの主題はロックの書物が出たのちにもまだまったく新しいものだったが、わたしの書物が出てからもあいかわらず新しいものと考えられるのではないかとわたしは大いに心配している。

人は子どもというものを知らない。子どもについてまちがった観念をもっている。議論を進めれば進めるほど迷墜にはいりこむ。このうえなく賢明な人々でさえ、大人が知らなければならぬことに熱中して、子どもにはなにが学べるかを考えない。かれらは子どものうちに大人をもつと心をもちいて、わたしの方法がすべて空想的でまちがいだらけだとしても、人はかならずわたしが観察したことから利益をひきだせるようにした。なにをしなればならぬかについては、わたしは全然みそこなっているかもしれない。しかし、はたらかけるべき主体については、わたしは十分に観察したつもりだ。とにかく、まずなによりもあなたがたの生徒をもつとよく研究することだ。あなたがたが生徒を知らないということは、まったく確実なのだ。そこ

第一編

万物をつくる者の手をはなれるときすべてはいいものであるが、人間の手にうつるとすべてが悪くなる。人間はある土地にほかの土地の産物をつくらせたり、ある木にほかの木の美をならせたりする。風土、環境、季節をこぢまませにする。犬、馬、奴隷をかたわにする。すべてのものをひっくりかえし、すべてのものの形を変える。人間はみにくいもの、怪物を好む。なにひとつ自然がつくったままにしておかない。人間そのものさえそうだ。人間も乗馬のように調教しなければならぬ。庭木みたいに、好きなようにねじまげなければならぬ。

しかし、そういうことがなければ、すべてはもつと悪くなるのであって、わたしたち人間は中途半端にされることを望まない。こんにちのような状態にあっては、生まれたときから他の人々のなかにほうりだされている人間は、だれよりもゆがんだ人間になるだろう。偏見、権威、必然、美例、わたしたちをおさえつけているいっさいの社会制度がその人の自然をしめこらし、そのかわりに、なんにももたらさないことになるだろう。自然はたまたま道のまんなかに生えた小さな木のように、通行人に踏みつけられ、あらゆる方向に折り曲げられて、まもなく枯れてしまいうろう。

大きな道路から遠ざかて、生まれたばかりの若木を人々の意見の攻撃からまもることをこころう。うえた、やさしく、先見の明ある母が、わたしはあなたにうったえる。若い植物が枯れないよう

に、それを育て、水をそそぎなさい。その木が結ぶ果実は、いつかあなたに大きな喜びをもたらすだろう。あなたの子どもの魂のまわりに、はやく根をめぐらしなさい。根のしるしをつけることはほかの人にできるが、じつさいに障壁をめぐらせる人は、あなたのほかにはいない。植物は栽培によってつくられ、人間は教育によってつくられる。かりに人間が大きく力づくよく生まれたとしても、その体と力をもちいることを学ぶまでは、それは人間にとってなんの役にもたつまい。かえってそれは有害なものとなる。ほかの人がかれを助けようとは思わなくなるからだ。そして、ほうりだされたままのその人間は、自分にながが必要かを知るまえに、必要なものが欠乏して死んでしまうだろう。人は子どもの状態をあわれむ。人間がはじめる子どもでなかったなら、人類はとうの昔に滅びてしまったにちがいない、ということがわからないのだ。わたしたちは弱い者として生まれる。わたしたちには力が必要だ。わたしたちはなにももたずには判断力が必要だ。生まれたときにわたしたちがもってなかったもので、大人になつて必要となるものは、すべて教育によってあたえられる。

この教育は、自然か人間か事物によってあたえられる。わたしたちの能力と器官の内部的発展は自然の教育である。この発展をいかに利用すべきかを教えるのは人間の教育である。わたしたちを刺激する事物についてわたしたち自身の経験が獲得するのは事物の教育である。わたしたちからわたしたちはみな、三種の先生によって教育される。これらの先生のそれぞれの教えがたがいに矛盾しているばあいには、弟子は悪い教育をうける。そして、けつして調和のとれた人になれない。それらの教えが一致して同じ目的にむかっているばあいには、弟子はその目標

とおりに教育され、一貫した人生を送ることができる。こういう人だけがよい教育をうけたことになる。ところで、この三とおりの教育のなかで、自然の教育はわたしたちの力ではどうすることもできない。事物の教育はある点においてだけわたしたちの自由になる。人間の教育だけがほんとうにわたしたちの手ににぎられているのだが、それも、ある仮定のうえに立つてのことだ。子どもにまわりにいるすべての人のことはや行動を完全に指導することだれに期待できよう。だから、教育はひとつの技術であるとしても、その成功はほとんど望みないといい。そのために必要な能力はだれの自由にもならないからだ。慎重に考えてやってみよう。これは、いくら何でも目標に近づくことだ。目標に到達するには幸運に恵まれなければならない。この目標とはなにか。それは自然の目標そのものだ。これはすでに証明済みのことだ。完全な教育には三つの教育の一致が必要なのだから、わたしたちの力でどうすることもできないものにはかの二つを一致させなければならない。しかしおそろく、この自然ということばの意味はあまりにも漠然としている。ここでそれをはっきりさせる必要がある。

自然とは習性にはかならない、という人がある。これはなにを意味するか。強制によってでなければ得られない習性で、自然を押し殺すことにならない習性があるではないか。たとえば、鉛直方向に伸びようとする傾向をさまたげられている植物の習性がそれだ。その植物は、自由にさこれでも強制された方向に伸びつづける。しかし、樹液はそのために本来の方向を変えるようなこととはしない。そこで、植物がさらに伸びていくと、その伸びかたはふたたび鉛直になる。人間の傾向も同じことだ。同じ状態にあるかぎり、習性から生じた傾向をもちつづける。しかもわたし